古代象形絵文字作家 竹本大亀氏による「建築」揮毫

第10回 京都建築賞 結果発表

京都建築賞は、京都府建築士会の創立60周年を記念して創設されました。京都の歴史的文脈を踏まえつつ創造性の高い建築作品を表彰し、その活動及び業績を広く社会に伝えることにより、京都及び建築の継承・発展に資することを目的とするものです。第4回からは、次代を担っていく建築士の支援を目的として、京都建築賞に特定のテーマを設定する新たな部門「藤井厚二賞」を創設しました。藤井厚二賞については11月号、12月号で紹介します。

主催　一般社団法人 京都府建築士会
後援　京都府・京都市・宇治市

最優秀賞

toberu 1・2
設計者　大西麻貴・百田有希（一級建築士事務所 大西麻貴＋百田有希／o＋h）

優秀賞

下鴨の家
設計者　畑　友洋（㈱畑友洋建築設計事務所）

京都東山計画（山荘 京大和・パーク ハイアット 京都）
設計者　原田哲夫・松田知也・白波瀬智幸・仲　晴男（㈱竹中工務店）

奨励賞

下鴨共庭住宅
設計者　中田　哲（中田哲建築設計事務所）
　　中田貴子（好日舎）

特別賞

京丹波町役場 新庁舎
設計者　香山壽夫・長谷川祥久・松本洋平・高橋愛子（香山建築研究所）
　　萩生田秀之（KAP）　南井克夫（環境エンジニアリング）
　　安田哲也（NPO法人サウンドウッズ）　安井　昇（桜設計集団）

［審査委員会］　委員長　竹山　聖（㈱設計組織アモルフ 代表取締役）
　　委　員　井上章一（国際日本文化研究センター 所長）
　　永山祐子（㈲永山祐子建築設計）

古代象形絵文字作家　竹本大亀（たけもとだいき）氏 プロフィール

1952年、滋賀県大津市生まれ。高等学校にて芸術科目として書道を選択、ライフワークとして書アーティストへの道を歩む礎を高校生時代に築き、書一筋の人生を歩み、独自の世界を築いている。

漢字のルーツが絵文字であることに注目。現代の文字は絵・絵文字が記号化・符号化いわば文字化したもの、またそれは絵が抽象化したものとも言え、現代の文字を具象化することで絵文字ならではの表情や生命感を再現し、書道界に新境地を開き独自の世界を展開している。

甲骨文字や青銅器文字を用いて、世界平和や人類の幸福を神に祈願するという揮毫（きごう）活動を行っており、初回は1997年の阪神・淡路大震災後の復興を祈願して生田神社で行い、以後、青蓮院門跡・清水寺・八坂神社等で奉納祈願揮毫を行う。2012年以降は京都・松尾大社の正月行事として神に通じる古代神聖文字にて、この一年をこの文字のもと、ポジティブに歩むという1字を募集、奉納祈願揮毫を行っている。

2022年 京都建築賞 審査総評

審査委員長　竹山　聖

現在の審査委員メンバーの構成となったのが2018年の第7回京都建築賞審査で、以来毎年まず全員揃って一次書類選考を行い、日を改めてこれまた全員で現地審査に出向いて議論を重ね賞を決定するというプロセスを踏んできた。フェアに、そしてオープンに議論を重ねて結論を得るわけだが、これが個人的にはとても刺激に満ちた、そして勉強になる審査過程であった。審査委員同士の会話はもちろん、現地での関係者の説明から学ぶことも、とても多い。

井上章一委員とは、氏がまだ『霊柩車の誕生』を世に問い研究者としての道を歩み始めるまでの時期に、一緒にドローイング展(そういえばそのときの氏のドローイングも霊柩車であった)を開催したりした学生時代からの縁もあって、気心が知れている。しかし、その経験や辿った経歴を反映して互いの視点は違い、いわばより広く社会や歴史に根差した、そして本人曰く、「プロの建築家とは異なる」視点からの批評を提供してくれる。

活躍の場を海外にも広げる永山祐子委員は、今回も日本館を設計したドバイの万博開催と時期が重なって東奔西走の中の審査だったが、建築家としての視点は共通するものの、やはり異なった角度からの意見をもらってハッとさせられることが多い。女性ならではのきめ細やかな感覚(男性がきめ細やかでない、と言っているのではないけれど)があり、観念的な議論に走らぬ地に足のついた生活者としての視点もある。ともあれ、審査過程はそのまま話題の尽きない珍道中でもあって、いつも楽しい時間であった。

特別賞／京丹波町役場 新庁舎

コンペで選ばれた建築であり、もともとその要項に木の活用が謳われていたとはいえ、ここで試みられているのは単に木造の建築とするということだけでなく、地域の山林と建築設計と建設を結び合わせるシステムを構築する試みだ。そして、たとえば大断面の要求される柱には集成材でなく、製材された無垢材を接着剤でなく斜めに刺した金属の留め具で緊結するという方法が用いられるなど、チャレンジングな構造と工法が試みられている。その一部にはあえて接着剤を実験的に用いてもいて、しかし結局のところ接着剤を塗布しないほうがよい結果を得た、という実験建築の意味合いも持っている。議場の空間には木を用いた透明感のあるデザインがなされていて、スケール感も心地よい。この建築全体を通して描かれているのは、地域の産業と連携した、森林から建築、そして地域の生活に至るビジョンであり、未来を生み出す物語の力がそこにある、と感じた。林業に勇気を与える建築の物語でもあって、まさしく建築の可能性を広げるプロジェクトである。

奨励賞／下鴨共庭住宅

並んだ三軒長屋という構成を、庭を共有する三つの集合住宅に組み直す試みである。かつての地域を形成したビルディングタイプが新しく更新されていくときに、経済の論理に則ってバラバラに立て直されるのでなく、また同様の構成のテラスハウスのようなそれをとるのでもなく、共有する庭を囲む形として、それを街路から緩やかに切り離しながら垣間見えるようにする、という手法は、この地域の新しい景観を生み出すきっかけとなっていくのではないだろうか。街路と住戸が直に接するのではなくて、ワンクッションの緩衝地帯が置かれることによって、生活の場が守られる。そして守られながらもまちにつながっていく。現地審査の際の井上委員の言葉を借りるなら、これはまさに「建築が可能にする社会実践であり地域貢献」であるといえるだろう。

優秀賞／京都東山計画

東山の山裾の斜面に立つ老舗の料亭を再生しつつ、その景観に溶け込んだ新しいホテルのあり方を提示している。街路に沿うスケールを意識しながら、連続するミセの表情をもつ建築のファサード、庭を囲む料亭建築の再構成、そして地形を巧妙に利用し、豊かなシークエンスをもたらす道行き空間によって結ばれたホテル客室、そして京都の街を遠く西山まで見晴らすバーとレストラン。山裾に展開する甍の重なりという京都らしい風景を再発見しつつ組み立て直す、という意欲的な取り組みであって、部屋ごとに異なる風景の切り取り方が見事である。単なる短期的な利益追求を超え、長い年月を見据えて建築構想の可能性に全力を傾けたプロジェクトだと言えよう。

優秀賞／下鴨の家

大地に近い場所と天空に近い場所を対比的にデザインしつつ、賀茂川と比叡山という周囲の景観と応答するという全体構成を持つ。整理された単一の原理に基づかないために、外観は複雑な様相を呈している(もちろんデザイン的にはとても洗練されているものの)けれども、内部の空間はその異質の要素のつながりが、切り離されたり、また結び合わされたりして驚きと発見に満ち、多様な空間の重ね合わされた心地よい住まいを実現している。永山委員の言葉を借りるなら「楽しんで住んでいる住み手の喜びが伝わってくる」住宅である。

最優秀賞／toberu 1・2

同じ街路に近接して並んだ二つの建物であり、起業のためのアイディアを発見し磨き上げる施設はどのようにあるべきか、という、これまでにない建築計画に空間的な解答を与えようとする試みである。とはいうものの答えはなく、異質の人間の出会いの可能性を演出する舞台のような建築がここでは提案されている。すなわち、奥行きの長い敷地を生かしながら、さまざまな大きさや高さの部屋を立体的に組み上げながら、そこにさまざまな出会いの場が組み込まれていく。ふと連想したのは複雑系というアイディアを生み出したサンタフェ研究所。ただそことは風土も文化的背景も異なる京都という街ならではの発見的な空間がここに結実している。さながら立体的なトオリニワとでもいえる空間によってプライベートとパブリックを緩やかに切り離しながら結び合わせる工夫が建築全体を活性化している。刺激的な良い企画に恵まれ、建築が本来持つ空間的な喜びと、柔らかで暖かな雰囲気が満ち溢れる建築である。

toberu 1・2

最優秀賞

設計者：大西麻貴・百田有希／一級建築士事務所 大西麻貴＋百田有希／o+h



toberu 1

【講評】

現代の寺子屋とも言うべき新しい形の住み込み型インキュベーション施設である。ここに集まった参加者が4ヶ月間、共同生活をしながら未来に花開く種がつくられる、そんな場所だ。実際ここで様々なアイデアが生まれ、実装されているという。

まず、toberu 1に。内容を細かく知るよりも前に、入った瞬間からここにはいい気が流れているという感覚があった。入ってすぐの中庭に面した吹き抜け空間の窓にかけられた天井から垂れ下がる長いカーテンがまるでダンスをしているように風に優しく揺れている。誘われるように中に入ると長いテーブル、テーブルに沿って設けられたキッチンの上の吹き抜けから優しい光が落ちる。さらに先にもう一つ中庭があり焼き物の青いタイルが落ち着いた光を放っている。テーブルのある共用空間のやさしくカーブした壁を隔てた向こう側は細長く天井の高い図書コーナー。中庭、そして奥に抜ける細長い廊状空間、吹き抜けの台所など京都の路地や町家的な要素を散りばめながら、風の流れに合わせて設けられた様々なスケールの空間は時に親密に迫ってきたり、時にダイナミックに突き放されたり、ここに来た参加者の心理的な抑揚にシンクロすることが想像できる。上の各個室も様々な部屋が用意されており、そこまで大きな施設でない中でめくるめく体験があり、滞在者の時間を彩ってくれる。また囲まれた外部への接続も様々な形で作られており、外から見えている風景としても魅力的だ。

toberu 2。こじんまりした外観からは想像できないほどダイナミックな建築であった。入ると地下一層分下がり、中央に3層の吹き抜け空間を有している。木の柱が3層分まっすぐ伸び、上から光が降り注ぐ空間はどこか神聖で、さっき入ってきたばかりの道はすぐそこに見えるのに静謐で、急に異世界に



toberu 1



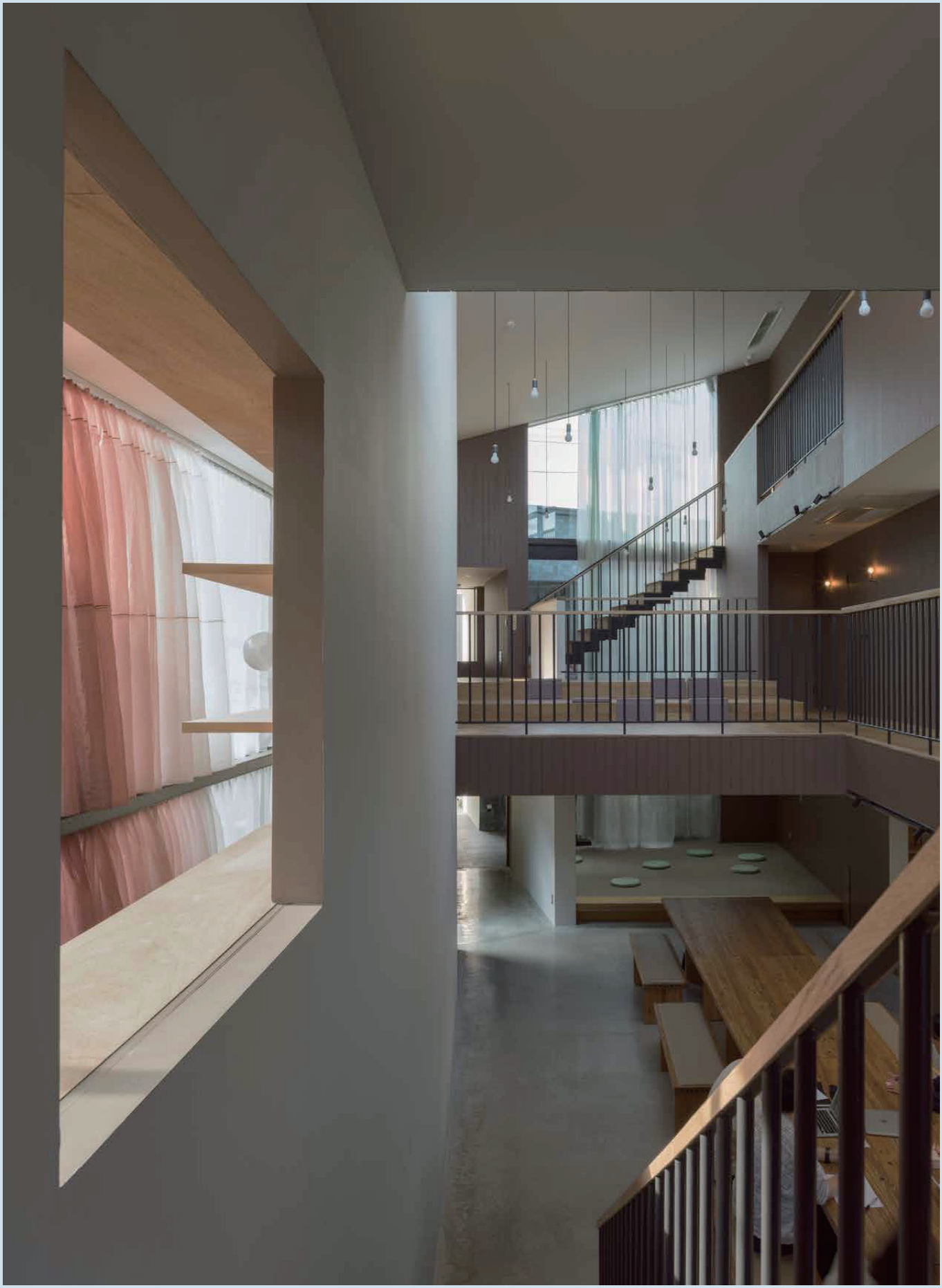
迷い込んでしまったかのような感覚だ。所々に隠された縦動線によって登っていくと思わぬ場所にでる。吹き抜け空間に設けられた各部屋の窓から微妙に角度を振りながら視線が抜け、吹き抜けに満たされた優しい光が部屋に流れ込んでくる。素材の使い方も秀逸で優しいベージュ色を基調とした土壁、タイル、そして磨かれたコンクリート、木の角材、丸太、光の反射で表情が変化し、影の濃さで微妙に色合いが微妙に変化するなど、光を吸い込み吐き出すような素材によってここにしかない質感が生まれている。

　両方の建物に共通して、京都の街中というコンテクストから京都の路地空間や京町家が発想の原点にある。京都賞なので当然のことながら京都の要素が原点にある作品は、私が審査に加わったここ数年を見ても多く見られる。その中でもこの2つの作品は原点は同じでありながら京都というコンテクストをエンジンに大きなジャンプがあり、それぞれが固有の建築として昇華されていた。新しい形のインキュベーション施設というプログラムそのものの魅力もさることながら、様々な地から京都の街中に訪れ、ここで一定期間生活する人々を時に奮い立たせ、やさしく包み込む居場所、建築の力と優しさを感じる建築であった。審査の過程でもその点は他作品の中で最も高く評価され、受賞に至った。

（永山祐子）

所在地／京都市左京区
用　途／寄宿舎
竣　工／toberu１：2019年5月
　　toberu２：2020年6月
敷地面積／toberu１：455.92㎡
　　toberu２：354.88㎡
建築面積／toberu１：303.78㎡
　　toberu２：207.78㎡
延床面積／toberu１：564.16㎡
　　toberu２：493.81㎡
構造規模／toberu１：鉄骨造3階建て
　　toberu２：木造
　　地上2階
　　地下1階建て

写真撮影／Yurika KONO



toberu 1



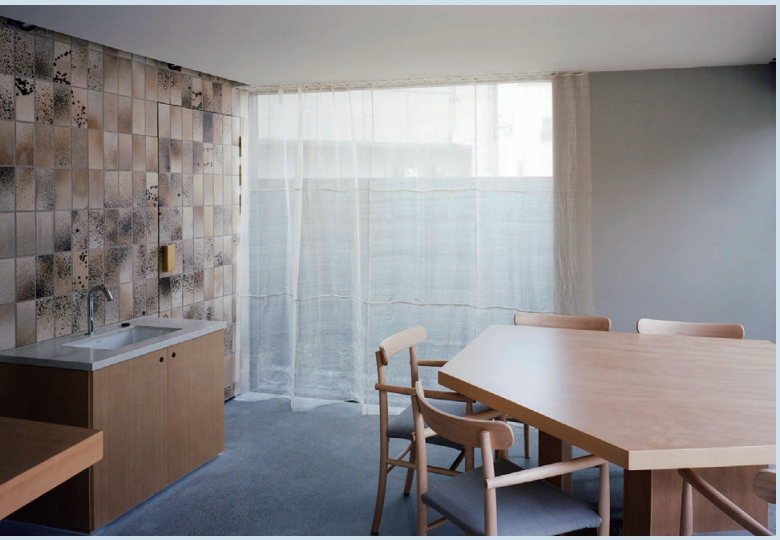
toberu 1



toberu 2



toberu 2



toberu 2



toberu 2



toberu 2



toberu 2

下鴨の家

優秀賞

設計者：畑　友洋／㈱畑友洋建築設計事務所



【講評】

近づいていくと賀茂川に向いて宙に浮いた家型の部屋が見えてきた。さらに近づくと、この住宅を構成している重なり合った切妻屋根のボリュームの間からチラチラと中の様子が見えてくる。周囲の静かな住宅地の要素、スケールを再構築したような形状。切妻の屋根、ベランダ、窓。中に入ると小さく分節されながらも、つながり合った部屋部屋、そこに思わぬところから光が降り注ぐ。深い軒に反射しながら入る光はとても柔らかく、優しく空間を包み込む。上の階へと上がっていくとこの住宅の中心に位置するリビング、ダイニングとなっている。適度な段差によって分節された空間、その段差には外の風景が挿入される。家の中にいながら住宅街の中に浮かんでいるような独特の浮遊感がある。それぞれの空間から繋がるテラスの上にはさっきの家型の部屋が浮いている。家型の部屋は一番トップ。階段を上がり、キャットウォークを歩くとやっと行き着く。賀茂川が一望できる。賀茂川の土手道が少し上がっているためにすぐ間近に感じる。家の中にありながら離れのような少し距離のある空間。ここで月夜にお酒を飲んだら最高だろう、なんていう会話が思わず審査員の間で出た。日常の中に浮かぶ非日常空間。この家にはもう一つ非日常空間が用意されていて、それは1階の奥にある茶室だ。この茶室からしか望むことのできない小さなお庭も用意されている。小ぢんまりした茶室に座って外からの風を感じていると、道に面しているにも関わらず奥の間のような静寂を感じた。この所々にある非日常空間の存在がこの家の中に不思議な奥行き感を生み出している。

小さな2人の子供を育てながら暮らす4人家族。印象的だったのはここに暮らすクライアントがこの家をとても楽しんでいる様子だった。その喜びに溢れた様子が高く評価に結









所在地／京都市北区
用　途／専用住宅
竣　工／2021年10月
敷地面積／156.29㎡
建築面積／107.28㎡
延床面積／206.89㎡
構造規模／木造一部鉄骨造3階建て

びついた。住宅の最終的な評価は私たち審査員ではなく住み手であると改めて感じた。そしてこの家はこれからも家族の大切な思い出を紡いでいくだろう。その姿は設計者にとっての一番のご褒美だ。

（永山祐子）

京都東山計画（山荘 京大和・パーク ハイアット 京都）

優秀賞

設計者：原田哲夫・松田知也・白波瀬智幸・仲　晴男／㈱竹中工務店



【講評】

「パークハイアット」、そしてこの地で長く営まれ親しまれてきた老舗の料亭「京大和」のコラボレーションによる新しい宿泊施設であった。まず、応募要項の断面図を見て驚いた。建物のほとんどが地下に埋まっていると言ってもいいような建築である。機械関係は全て地下に埋められ、パブリックスペースなど建物の主要な部分も半地下となっている。設計作業の多くが、内部からの眺望、そして外部からの建ち方に割かれている。東山の斜面に幾重にも重なる建物群はそれぞれの棟からの見え方などが細やかに配慮されている。山に沿って建物内を上がっていくと老舗の料亭である京大和の翠紅館があり、見事な池を有した日本庭園と共に保存され、庭に面したホテルの客室からこの見事なお庭を楽しめるようになっている。茶室は移築され、八坂の塔の見える軸線にぴたりと配置され、目の前のレストラン、バーの建屋を見通しながら、きちんと塔が見えてくる。客室は近景のお庭に囲まれた静かな客室、また、遠景が望める浮遊感のある客室、それぞれに趣が違う部屋で構成されている。深く低い軒、そしてその上のハイサイドの組み合わせは日差しを柔らかく遮り、日本的なスケールを感じさせつつも部屋の開放感を感じさせる作りとなっており、とても効果的であった。柱のように独立した特徴的な什器はどうしても大きくなってしまう柱の印象を弱めていた。様々な趣の70室の部屋はそれぞれに外部空間と豊かな関係を築いている。パークハイアットの系列のホテルの中では圧倒的に少ない部屋数となっている。

事業者が利益だけを追求するのではなく場所性と価値を理解し、設計者がその意図を汲みながらここでしか得られない経験を作り出している。時代の流れの中で全国の料亭、旅館がこれからの未来を模索する中、京大和のような老舗の料亭が今後を見据えた際に外資系企業との協業は新しい未来像の一つなのか









所在地／京都市東山区
用　途／ホテル・飲食店舗
竣　工／2019年8月
敷地面積／ 8,796.47㎡
建築面積／ 3,723.74㎡（既存木造を含む、風致地区の緩和適用後は3,342.85㎡）
延床面積／14,065.05㎡（既存木造を含む）
構造規模／鉄骨造、鉄筋コンクリート造、木造
地上2階地下4階建て

写真撮影／Nacása & Partners Inc.

もしれない。様々に思いが巡る中、新しいホテルのファサードが二寧坂の雰囲気を維持し、またその波及効果によって町並みがより美しく維持されている様に感じられ、このコラボレーションの大きな功績を感じた。それら全体の計画の有り様が高く評価された。

（永山祐子）

下鴨共庭住宅

奨励賞

設計者：中田　哲／中田哲建築設計事務所
中田貴子／好日舎







【講評】

もとは、いわゆる長屋が3軒ならんでいた。そのそれぞれに、小さな庭はあったろう。だが、広い庭や、ゆったりしたパーキングエリアは、のぞめない。ひとつひとつの家は、こじんまりしたオープンスペースしか、獲得しきれなかった。

そんな3棟を、建築家は立体的に組み立てなおしている。そして、庭を共有化させた。けっこう豊かなひろがりを、この3棟にもたらしている。パーキングエリアも、充実させた。のみならず、新しくオープンテラスも、たもたせている。

ルームシェアならぬ、ガーデンシェアが、ここではみのっている。共有化へふみきることで、庭はずっと豊かになる。自分だけの庭という執着を、住み手にあきらめてもらう。そうすることで、以前は考えられなかったような空間が、勝ちとれた。

建築の意匠に、とりたてて斬新なところがあるわけではない。だが、建築家の工夫は、間違いなく新しい集住のあり方を、みちびきだしている。周囲にならぶ他の長屋群とくらべ、そのたたずまいは新鮮にうつる。建築が生活の改善に寄与しているその姿に、拍手をおくりたい。

（井上章一）

所在地／京都市左京区
用　途／共同住宅
竣　工／2021年1月
敷地面積／452.11㎡
建築面積／255.33㎡
延床面積／432.54㎡
構造規模／木造2階建て

第10回 京都建築賞

京丹波町役場 新庁舎

特別賞

設計者：香山壽夫・長谷川祥久・松本洋平・高橋愛子／香山建築研究所
萩生田秀之／KAP 、南井克夫／環境エンジニアリング
安田哲也／NPO 法人サウンドウッズ 、安井　昇／桜設計集団



議場　写真撮影／小川重雄写真事務所 小川重雄



外観　写真撮影／香山建築研究所 松本洋平

所在地／船井郡京丹波町
用　途／庁舎
竣　工／2021年8月
敷地面積／18,822.75㎡
建築面積／ 2,784.83㎡
延床面積／ 4,923.21㎡
構造規模／木造（軸組工法）および
鉄筋コンクリート造
一部鉄骨造
2階建て

【講評】

林業の危機がさけばれだして、ひさしい。敗戦後の建設業は、単価の安い輸入木材に多くを依存した。日本の木は、あまりつかわれなくなっている。おかげで日本の林業は衰弱した。今は行政の補助をもらって、なんとか生きのびている。それが現状だと思う。

京丹波は、林業の町である。そんな町の庁舎が、地元の木材をいかしてたてられた。建築が地場産業とともにあろうとする。衰退を余儀なくされた地元の産業に、勇気と希望をあたえる。その象徴的な施設として、設計され、建設された。建築には、こういう形の社会貢献もあるのだと、この庁舎は教えてくれる。そこを、まずは評価しておきたい。

今日、たいてい地方自治体庁舎は、鉄筋コンクリートでたてられる。その類型もできている。じゅうらいからあるパターンにしたがえば、そこそこの庁舎がたつだろう。また、そのパターンによりかかったほうが、仕事は楽にすすめられるはずである。

だが、建築家は、そういう前例のない木造庁舎の設計と、むきあった。自分の頭で、一から考えなければならないことも、たくさんあったにちがいない。林業や製材業にたずさわる専門家から、教えこうところも少なくなかったはずである。鉄筋コンクリートとくらべれば、はるかにめんどうくさい仕事だったのではないか。

材をくみあわせ柱をつくるさいに、どんな処理をこころみたか。ビスを利用する手段は、いかにみちびきだされたのか。たとえば、そんなことを現場ではたらいた建築家は、語ってくれた。

その説明が、過不足なくのみこめたとは言うまい。少なくとも、私（井上）は理解しきることができなかった。だが、柱の工法がきまるにいたる過程を、建築家は生き生きとつたえてくれる。困難はあったが、試行錯誤のなかで解決案を見いだした。その充実ぶりが、よくわかる。ルーチンワークにはない喜びが、半面の苦闘もあったのだろうなと、感じいる。

現地視察の最後に、庁舎の背後を見てまわった。新しい建築だが、その印象は、どこかなつかしい。かつての木造小学校などを、しのばせた。そう言えば、正面導入部の通路も。小学校の渡り廊下をほうふつとさせる。設計者が、そのノスタルジーを演出しようとしていたのかどうかは、わからない。しかし、そのたたずまいは、公共建築が林業とともにあった時代を、想わせた。

この姿が、全国の林業に活気を与える存在となってくれれば、うれしい。その期待もこめて、この賞を贈呈させていただくことにした。

（井上章一）

古代象形絵文字作家 竹本大亀氏による「建築」揮毫

第10回 京都建築賞
藤井厚二賞 結果発表



主催　一般社団法人京都府建築士会
後援　京都府・京都市・宇治市

藤井厚二賞

椎葉邸
設計者　萬代基介（萬代基介建築設計事務所）

現地審査選出作品

下鴨共庭住宅
設計者　中田　哲（中田哲建築設計事務所）
　　中田貴子（好日舎）

toberu 1・2
設計者　大西麻貴・百田有希（一級建築士事務所 大西麻貴＋百田有希／o+h）

伏見・古家を取り込む増築
設計者　野村直毅

一乗寺の住宅
設計者　山口陽登（㈱ＹＡＰ一級建築士事務所）

［審査委員］長坂　大（京都工芸繊維大学 教授）
　　平塚　桂（ぽむ企画 編集・ライター）
　　山根健太郎（expo）

藤井厚二賞は、幾多の実験住宅の計画を通じて卓越した洞察力、探究心、行動力をもとに新しい建築のあり方を追求した藤井厚二氏に敬意を表し、先人の叡智に学び、新たな挑戦をしている建築士の飛躍の一助となることを意図しています。

今回のテーマ「転換」には、13作品の応募があり、3月7日の書類審査により現地審査対象の5作品を選出。4月6日に現地審査を行い、慎重な議論の結果、「椎葉邸」が藤井厚二賞に選出されました。

審査講評と受賞作品について2回に分けて掲載します。

2022年 藤井厚二賞 講評（審査経過）

審査委員　長坂　大

今回は現地を見たいと思う魅力的な応募作品が多かったが、その中でも特に「椎葉邸」は魅力的であった。この作品は、既存建築の改修と新築両方の要素を持つ建築で、その両立の仕方がすばらしい。「保存すること」と「新しいものを生み出すこと」という2つの実現を、小さな住宅の中で成し遂げている。一定の歴史を経た住宅群が狭い街路に面して立ち並び、落ち着いた雰囲気を醸し出している界隈である。

まず、この住宅では既存の佇まいが保存されている。佇まいとは、建物だけでなく、庭や塀などと一体的に感じられるその住まい全体のありようを指している。既存の門はそのまま利用され、生垣の向こうに見える庭木の大半が保存され、建物の2階部分は建替え前とほとんど変わらない姿で再現されている。以前の様子を知らない私にもそのことが感じられるのは、既存樹木が丁寧に保存されているために、通りからみると樹木群の枝葉の関係が成長の原理に適合していて、落ち着いて見えるせいだろう。敷地内に入ると、主要な樹木を巧みにかわしながら、ギリギリの位置に新しい平屋部分が建てられている。通りからは平屋部分はほとんど見えないので、一度解体してほぼ同じ姿で再現されている2階部分があることで、近所に住む人々にとっては、何も変化してないように感じるのではなかろうか。

次に、門をくぐって敷地内に足を踏み入れると、印象は一変する。平面計画として様々な角度に振られた新築部分が、中心の既存2階屋を取り囲むように据え付けられ、敷地内は全体として全く新しい生活空間として再構築されている。その1階の中心あたりから外側をみると、新旧のボリュームの組み合わせによってできた空間が、その背後の既存樹木に映えて、独特の世界を生み出している。そのバランスがとてもいい。

構造的なアイデアも優れている。既存2階屋のそれぞれの四隅を固めるように平屋部分が接続されているが、構造的な効果を感じさせないような軽やかな扱いとなっている。階段や建具など、細部に再利用された既存建築の部品に対する取り扱いも新旧の対比の扱い方として充実していて、総合的な質が非常に高い作品である。今年のテーマの「転換」にもぴったりの内容である。

以下、入選作以外で現地審査を行った作品について少し触れておこう。

伏見・古家を取り込む増築

細長い敷地を、現代的な土間空間の提案をしながらすっきりとまとめられている。道路側の迎え入れる屋根形状にも魅力がある。前面のカーポートが気になるのと、古家を取り込んでいることによるポジティブな効果がもう少しインテリアに現れるとよかっただろう。

1・2 Toberu

大手企業を対象とした長期滞在型研修施設が低層の木造住宅地域にあることが印象的な施設である。周囲と異なる世界でありつつ、一定の関係を持つ施設、その内部をどのようにつくるのか。こうした課題に対して、「1 Toberu」の図書コーナーや「2 Toberu」の掘り込んだ1階の床や庭の設定は、周辺の都市のイメージを意識した提案として、魅力的であり、一定のオリジナリティーがある。あえていうならファサード（特に「2 Toberu」）がそのようなシナリオとしては理解しにくいと感じた。

一乗寺の住宅

マンションの改造という課題はそもそも制約が大きい。そうした条件下にあって、この作品は空間構成上の明快な提案と魅力的な居住性が実現されている。資料で見た段階では、設計手法がやや強引かも?と思っていたが、現実には、優れた住み手の住みこなし能力に合った、魅力的な生活空間が実現していた。改造前は分割されていた空間がワンルームになることで、東西への抜けがある既存区画が最大限に生かされる住まいとなっている。

下鴨共庭住宅

オーナー住居と賃貸物件を一体敷地で解くことで魅力的な共用空間を実現できており、特に不動産的な提案性という意味では高く評価したい作品である。日常の子供たちの遊び場に始まって、緑地として、居住者同士の様々な活動の場として使われる中庭が実現しているのもそうした効果である。ただ、そういうことなら、庭の植栽や園路のデザインはややつくりこみ過ぎだったかもしれない。

（平塚桂委員・山根健太郎委員の講評につきましては、紙面の都合上12月号に掲載させていただきます。）

藤井厚二賞

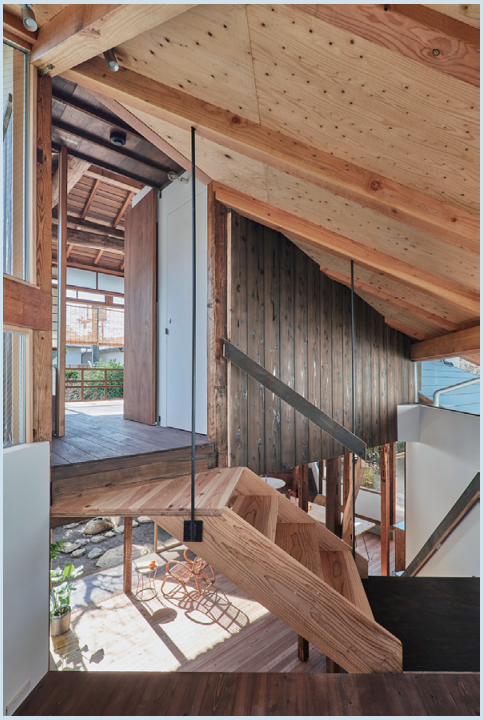
椎葉邸

設計者：萬代基介／萬代基介建築設計事務所

















所在地／京都市
用　途／一般住宅
竣　工／2021年11月
敷地面積／357.73㎡
建築面積／　93.50㎡
延床面積／131.95㎡
構造規模／在来木造

写真撮影／高木康広

2022年 藤井厚二賞 講評（審査経過）

●11月号に続き「藤井厚二賞」の特集です。

審査委員　平塚　桂

ふだん建物を数ページに翻訳して伝えるという仕事をしている。そこでどれだけ文字数が限られていたとしても盛り込むのが、建物の存在意義が何なのかという視点だ。といっても建物に社会的な責務を求めているわけではない。その建物があることで、界隈やそこを用いる人びとに、どんな「転換」が起きたのかに興味がある。それは写真や図面、設計者の言葉だけでは伝えきれないからだ。

審査という過程でも、書類だけでは存在意義を捉えにくい。そこで現地に足を運んだ際には可能なかぎりそこを確認した。意義が見えにくかったのが、【伏見・古家を取り込む増築】【toberu 1・toberu 2】の2作品だ。

【伏見・古家を取り込む増築】は界隈への影響という観点で、やや自己完結的に思えた。屋根やプランがいささか唐突に、周辺のデザインコードとは異なる角度に振れているからだ。敷地は交通量の多い通りに面し、建物のあり方が周辺環境に大きく関係する。そこで周辺のコードを崩す場合、もっと強固なビジョンが必要な気がした。

【toberu 1・toberu 2】は選ばれた人びとが4か月間滞在し事業アイデアを創出するというインキュベーション施設だ。2棟の建物いずれも京都の路地を引き込んだような空間構成を持つが、それが「事業アイデアの創出」という目的にどう影響を及ぼすのかがわからなかった。4か月も滞在すれば、場所や用途を組み替えたいという使い手からの需要もありそうだが、場所や置かれた家具の役割が固定的で、流動性が欠けて見えた。

残る3軒は、現地でそれぞれの意義が理解できた。

【一乗寺の住宅】はマンションの一住戸をスケルトンにし、多孔質の箱を配したリノベーションだ。書類では箱の存在が過剰に見えたが、現地では存在が適切で、また三方に開けた環境の魅力を効果的に引き出していると実感できた。さらに1住戸・1世代で完結しがちなマンションリノベの考え方を転換する案としても可能性を感じた。設計者は「住み手が変わるごとに毎回改修が重ねられてしまうマンションリノベのあり方への批評を込めた」と話していたが、確かにこの住戸の場合は改修で導入された型が骨格となり、他者へと引き継がれていく未来が見える。

【下鴨共庭住宅】はオーナー住戸＋2戸の賃貸からなる小規模な集合住宅だ。賃貸では内装材に消耗品が選ばれがちだが、ここでは磨き丸太などの長く使える材料を導入して居住性を高めるなど、賃貸マンションの事業モデルを転換しており好ましい。ただ共有の中庭がスタティックな「見るための庭」になってしまっているのがもったいなく感じた。中庭は各住戸の子どもたちの遊び場として大いに活用されているそうだが、登り降りできる傾斜や腰掛け、デッキなどインタラクティブな部分が設けられていれば、より使い勝手のある中庭になったのではないか。

【椎葉邸】は、代々引き継がれてきた築100年の日本家屋のリノベーションだ。増築した下屋がフライングバットレスのように既存母屋を支えるという独創的な改修手法で建物を物理的に強化しながら、庭と建物の関係や既存家屋の見え方を変えている。元々あった柱や建具などを増築部で活用することで、素材の魅力やこれまで蓄積された時間の流れを再発見できる仕掛けにもなっている。ただ既存母屋と増築部の取り合いは非常に複雑で、手間ひまをかけた検討を要したことは建築家でなくても想像がつく。他の建物に応用するのは難しい改修手法かもしれない。だがこの場合は改修で付与されたアートピース的な唯一無二の魅力が建物の存在意義を強め、未来に託していく効果も感じられる。

まちかどの建物1つで界隈の性格を転換できてしまうのが、京都の特に市街地における面白さでもあり怖さでもある。残った3作品はどれもプライベート性が高い住宅という用途ながら、街との関係も上手く再設計していて好感が持てた。議論は最後、【一乗寺の住宅】【椎葉邸】に絞られた。最終的には【一乗寺の住宅】に内包された箱が改変を許容しにくいつくりであることが気にかかり、消去法で【椎葉邸】を選定したが、悩んだ末の結論である。

審査委員　山根健太郎

「椎葉邸」での2つの転換について

1　クリストファー・ノーランのＴＥＮＥＴは、未来から過去に向かって時間を逆に進む人物たちを描き、たいへん奇天烈な映像をみせてくれるアクションＳＦですが、椎葉邸は過去から未来へと記憶を送りつなぐミッションには当然成功し、次に突然時間が過去に向かって進み始めて、再び順行、逆行の時間のやりとりの中に閉じ込められてしまうような不安と落ち着かない気分を味わえるアクション施設となっていて、リノベーションにおける時間の矢印の向きを考えずにいられない転換の場そのものでした。

　中心にある母屋に居ると、アクションに必須の爆発が起こってしまった直後の、四方に向かって壁や建具やらが勢いよく外に向かって飛び散った姿が観察できます。乱暴かもしれないけど、過去記憶という空間を爆破した清々しい未来への広がりがあります。記憶が積もった建材や加工物が将来に向かって連れ出され、思い出までもが自分以上に拡張される意図も感じます。今度は外に移動してそれぞれバットレス的新設のポイントから母屋を内側に眺めると、拡張は停止して転換をなし、時間が逆行して、もとある母屋に全てが連れ戻されていく収縮運動の始まりを感じます。宇宙の拡張が終わって収縮するイメージあるいは記憶に囚われ続ける微温い過去に閉じ込められるようなアクションＳＦのようです。既存建物の記憶をたくさん有した住人であるなら一層、懐かしくも不穏なループを堪能できそうな仕掛けの数々に、一過性でない改築物がそこにあると思いました。

2　アーティスト伊達伸明の「建築物ウクレレ化保存計画」は、取り壊される対象建築を、住んでいた人の肌感覚が多層に転写されたスクリーンと捉えて、記憶の張り付いた部分を取り出しウクレレとして作り替えて持ち出す、という作品ですが、その心の錬金術というべき手練れの技に倣いたいものだとよく思っています。椎葉邸も見覚えのある建具や階段、生活痕が蓄積されていた部分を存分に取り出し、大胆に変貌した形へと記憶を持ち出した、ユーモアある転写、転換作業の積み重ね製品となっています。既存記憶のある当人でなくても思わず微笑む無理を効かせた改編。部分の選定、取り出しと、新たな配置と意味付け、その細かな飛躍を積み重ねる膨大な現場作業工程を想うと相当に感銘を受けました。あらかじめ全てを決めて設計、施工されたのではない、真に器用仕事というべき熱量とチャーミングさが心に残ります。

「一乗寺の住宅」での転換について

　予め写真で見ていた時は、玄関入って目の前にある寝室への開口部の印象が強くて、見えてくるもの、見られる側との視覚の転換がスリリングなのかなと想像していました。実際その場に佇ませてもらうと、確かにその側面もありますが、そういった空間的な意図を強く感じるものでもなく、造作された面材の特に厚みと素材のラフさ、馴染んだフレームの連続といった構成に、一気に「新しいのに懐かしさ」を感じて引き込まれました。稲荷の鳥居をくぐり抜けながら、時々外側に逸れて回り込んだ思い出、ワクワクしながら8メガビットでスタートフォックスを遊んでいた時の記憶がふっと立ち上がるのでした。素朴で厚みのない面構成によるＣＧ空間にあれほど奥行きや色づきを感じて世界に入り込めたのは、コントローラーを握り締め、両手の感触をフル稼働させて視覚とリンクさせていたからに違いないはずですけど、一乗寺の住宅の先行ノスタルジーを喚起させるあたたかさは、壁でも棚でも天板でも色んなところが手で触れやすく、触覚の届く範囲に好きなモノが自由に置かれ過ごす感触が記憶と結びつくように存在しているからだと思います。

　そういった使い方をされていた住人の手の痕跡、まったく力んでいない住まい方の幸せな雰囲気によるところが大きいのだろうけど、「最初から懐かしい」を獲得した、ある意味幸せな偶然を敏感に手繰り寄せたぴったりサイズの仕事に、良かったなあと心から思える住まいでした。

現地審査選出作品

下鴨共庭住宅

設計者：中田　哲／中田哲建築設計事務所・中田貴子／好日舎



所在地／京都市左京区
用　途／共同住宅
竣　工／2021年1月
敷地面積／452.11㎡
建築面積／255.33㎡
延床面積／432.54㎡
構造規模／木造2階建て

toberu 1・2

設計者：大西麻貴・百田有希／一級建築士事務所 大西麻貴＋百田有希／o+h



toberu 2



toberu 1

所在地／京都市左京区
用　途／寄宿舎
竣　工／　toberu 1：2019年5月　　toberu 2：2020年6月
敷地面積／toberu 1：455.92㎡　　toberu 2：354.88㎡
建築面積／toberu 1：303.78㎡　　toberu 2：207.78㎡
延床面積／toberu 1：564.16㎡　　toberu 2：493.81㎡
構造規模／toberu 1：鉄骨造3階建て　toberu 2：木造地上2階・地下1階建て

伏見・古家を取り込む増築

設計者：野村直毅



所在地／京都市伏見区
用　途／住居
竣　工／2020年9月
敷地面積／182.39㎡
建築面積／101.72㎡
延床面積／152.35㎡
構造規模／木造2階建て

一乗寺の住宅

設計者：山口陽登／㈱ YAP 一級建築士事務所



所在地／京都市左京区
用　途／専用住宅
竣　工／2019年4月
延床面積／67.63㎡
構造規模／スケルトン：RC造
ジャイアント
ファニチャー：S造
地上9階建てのうち
5階部分